



Back to  
1969

## アジアの食料供給基地へ

〜大隅〜

水不足を克服して  
農畜産物の一大産地に成長  
現在もかんがい事業は進行中  
さらなる発展を目指す

大隅地域は約4万ヘクタールにもおよぶ広大な農地を有し、日本有数の食料供給基地です。鹿児島黒牛やかごしま黒豚をはじめ、東串良や志布志のピーマン、なんぐう地区(錦江町、南大隅町)のばれいしょといったブランド力のある食材も全国に出荷しています。現在では「実りの大地」という言葉がピッタリの大隅地域ですが、最初からそうだったわけではありません。

大隅地域の大部分は火山噴出物からなるシラス台地。保水性が極端に悪く、栄養に乏しい土壌で、かつては農業の難しい不毛の地でした。この荒地の本格的な開発は江戸時代になってから、薩摩藩では人口過剰な薩摩半島から大隅地域への移住を推進しました。しかし、農環境は非常に厳しく、できることは荒地地でも育つサツマイモの栽培や畜産などに限られていました。

鹿屋市北東部に広がる笠野原台地には「土持堀の深井戸」という古井戸が残っています。その深さはなんと64メートル。厚く積もったシラスの上での水の確保の困難さを物語っています。このような深井戸を掘って水を汲み上げたり、牛で水を運んだり想像を絶する労力を要していたのです。この地に初めて水道が引かれた

広告



①現在の笠野原台地 ②完成当時の高隈ダム（昭和42年 鹿屋市） ③土持堀の深井戸<sup>つっもっぼい</sup> ④通水が始まった頃の笠野原台地の様子（昭和40年代）  
⑤曾於北部地区の広大な農地を潤す谷川内ダム（平成24年度完成予定 曾於市）

のは明治33年。飲み水はなんとか確保できたものの、農業用水はまだまだ足りません。笠野原台地が現在の姿に近づくのは戦後になってからのことです。昭和33年に国営畑地かんがい事業の第1号として、国営笠野原かんがい排水事業がスタート。その内容は肝属川支流の串良川にダムを建設し、貯めた水を笠野原に送り込むパイプライン（約6.4キロメートル）を整備するという大規模なものでした。昭和42年に高隈ダムが完成し、昭和44年に同事業は完了。豊富な水が4807ヘクタールの農地を潤し、笠野原は豊穡の大地へと変貌。収量増と品質向上に加えて、野菜や茶など生産性の高い品目の栽培も可能になりました。

大隅地域の畜産については、昭和39年に国内初の産地食肉処理場が設置され、東京や大阪など大消費地への食肉での流通が可能に。その後、畜産基地の建設や志布志地区の飼料基地の操業開始など、畜産物を安定的に供給できる体制が整えられてきました。さらに平成6年には鹿児島県肉用牛改良研究所も設置され、バイオテクノロジーなどの先端技術も活用されています。

現在、大隅地域では曾於北部地区と肝属中部地区で国営かんがい排水事業が進行中です。これらの地区の事業が完了すると、既に事業が完了している曾於南部地区、曾於東部地区と併せて、曾於市、志布志市、大崎町、鹿屋市、肝付町の広大な農地へ農業用水が供給されることとなります。

畑地かんがい施設が整備された広大な農地を活用して、生産性の高い安定した農業が展開され、かごしまブランド産品をはじめ高品質な農畜産物の産地を形成、拡大する大隅地域。今後、日本の食料供給基地からアジアの食料供給基地へと大きく発展することが期待されています。

### かごしまブランド産地の指定状況（大隅地区が含まれているもの）

産地名	指定年月日	産地区域
東串良のピーマン	平成 4 年 3 月 3 日	東串良町、鹿屋市、肝付町
鹿児島黒牛	平成 4 年 4 月 28 日	県全域
かごしま黒豚	平成 11 年～18 年	県全域（13 生産系列）
なんぐう地区のぼれいしょ	平成 13 年 5 月 10 日	錦江町、南大隅町
東串良のきゅうり	平成 20 年 5 月 30 日	東串良町、鹿屋市、肝付町
志布志のピーマン	平成 21 年 5 月 29 日	志布志市
かごしまマンゴー	平成 22 年 5 月 28 日 平成 24 年 5 月 22 日	大崎町、志布志市、日置市、いちき串木野市、南さつま市
そお・かのやの Spreegik	平成 23 年 5 月 27 日	鹿屋市、曾於市、志布志市